

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

【R18】ネギに召喚された俺がこの先生きのこるには!?

【作者名】

ホットスパー

【あらすじ】

『ネギに召喚された俺がこの先生きのこるには!?!』で省略されたR18部分を投稿しています。

その他にもIFルートなど、ストーリーを無視して好き勝手に投稿する予定です。

第一話 常木とマナ

「あまり、女に恥を、かかせるな。
何年も、何年もこの時を待ったんだ、もう我慢出来ないんだ、早く来てくれ。」

マナが大粒の涙を浮かべながら、たどたどしい口調で胸の淵に秘めていた思いを口にする。

マナの涙は6年前の別れの時以来。俺なんかには想像出来ない以上の思いなのだろう。

マナを受け入れる。この行為はネギに対する裏切りかもしれないが、マナを拒否する事は出来ない。

拒否したら最後、マナが完全に壊れてしまいそうな気がする。それ以前に俺自身も止まらない。

いつの間にか自由になった手で自身の服を破り捨てるように脱ぎ捨てて、

マナと同様の格好になる。マナの裸体を弄るのに邪魔な両手に埋められている手袋も脱ぎ捨てる。

俺とマナの行為を黙認するかの如く、両手に具現化されているルシエラの「口」が固く閉ざされている。

極限まで火照った身体に夜の冷たい風が心地よいが、長く浴びていると風邪をしまいそうだ。

暖を求める様にベンチに横になっているマナの身体に抱き付き、マナに「ありがとう」と一言告げる。

マナに口付けをしながら、豊かな二つの乳房を両手で掴む。

口付けの最中ながらマナが甘美な声を漏らすがお構い無しにマナの乳房と唇を味わう。

マナの乳房は恐ろしく柔らかく、温かい。こんな物がこの世に存在しているとは……

女性の乳房を触ったのは生まれて初めてで、その独特の感触に興奮してしまう。

自身の手の力加減で柔らかい乳房が幾重にも形を変えるが、手を離すと直ぐに元の形に戻る。

なんて面白い物なんだろう、一生揉んでいても飽きそうにない。

乳房を揉みしだく両手に、新たな感触を感じる。手を離して確認すると、

乳房の中央に桜色の小さな突起物が腫れ上がる様に勃起しているのが見えた。

乳首だ。乳房とは全く違った感触に興奮を抱き、今度は乳首を集中して攻めようとする。

小さく勃起しているが、乳首を掌で揉みしだくのは無理なので、親指と人差し指で思いつきり摘んでみる。

「っくうっくぐああああ」

乳首を摘んだ瞬間、マナが人とは思えない雄叫びを上げる。

思わずマナの唇から口を離れたから良かったが、自身の舌を噛み切られる所だった。

そんな意趣返しにの為に、もう一度マナの乳首を摘んでみると、マナが再び雄叫びを上げた。

「ジン、女性の胸を、乱暴に扱わないでくれ。」

マナが俺の胸当たりを軽く拳骨して怒る。ごめん、ごめん。

あのマナを意のままに操っている様な気がして、つい調子に乗ってしまった。

お詫びの気持ちを表す為に、今度は優しくマナの乳首を摘むと、気持ち良さそうな声を上げた。

たかが乳首で感じ過ぎではなかるうか？もしかして母乳が出るのではないだろうか？

そんな事を思い付き、乳首を弄っていた片手を離し、赤ん坊が授乳する様に吸い付く。

舌で乳首を舐め回したり、軽く噛んでみたがマナの乳首から母乳が出る気配がない。

幾ら大人染みても、マナは妊娠している訳ではないので母乳が出ないのは当然だ。

少し残念な気持ちだったが、マナの乳首の感触を引き続き味わうために、再び舌で転がす。

マナの乳首を更に味わう為に思いつ切り吸ってみると、マナの身体が突然痙攣する。

マナの乳首から口を離し、「もしかして乳首だけでいったのか？」と質問をする。

「うるさい、黙れ、胸ばかり弄ってないで、

ジンも早く気持ち良くなってくれ。私だけがイカされては申し訳がない」

乳首だけでイカされたのが恥ずかしいのか、俺から目を逸らす。

マナの言う通り、俺の性器は限界まで膨張して、直ぐにでも爆発してしまいそうだ。

ベンチに無気力に横になっているマナの腹部に馬乗りになって、マナの性器をなぞってみる。

先程イカされたお陰なのか、マナの性器がお漏らしをしたように濡れている。

こんだけ濡れていれば、前座は必要ないだろう。

ベンチに横なって行為をする関係で、マナと正面から抱き合う様に挿入する形となり、

そのお陰で、人間童貞俺では自爆せずにマナの性器に上手に挿入出来るとは思えない。

その事をマナに伝え、スムーズに挿入出来る様に、自らの性器を広

げる様をお願いをする。

嫌味を言われると思ったが、マナが無言で股を開き、両手を使って自らの性器を広げる。

入れ易い様に広がったマナの性器に、限界まで熱り立った自らの性器を挿入しようとする

異物を押し返すような抵抗があったが、それを押し退けるように挿入する。

マナの性器に挿入した直後、初めての感触を味わう間もなく、マナが悲鳴を上げる。

俺の背中に腕を回し、助けを求める様に背中一杯に引っ掻き傷を残す。血が滲んだのが背中が熱い。

マナの反応に違和感を感じ、抱き締められている状態で、マナの性器に向かって手を延ばし、

俺の性器で広がったマナの性器を撫でた後に、面前まで持つて行くと赤く濡れていた。

これは血だよな？は？え？もしかしてマナって処女なの？

そんな事を口にした直後、眉間に衝撃が伝わる。マナに頭突きされたのだ。

「もしかしなくても私は処女だ。人を尻軽女みたいな扱うな！」

そうだったのか、なんとというか凄く意外。

てつきり魔眼の研究所でやられていると思っていた。

だから当時、高畑から貰った魔眼の研究所の報告書を破り捨てただけ、

俺の工口い妄想力が異常だっただけで、そんな同情は必要なかったみたいだ。

その事を正直に伝えると、マナが背中に新たな引っ掻き傷を残す。ご立腹の様だ。

今にも性器が爆発しそうだが、処女であるマナを乱暴に扱う訳には
いかない。

処女膜を破った痛みが晴れるまで、お互いの背中に腕を回す形で抱
き締めながら唇を貪り続ける。

マナが呼吸をする度に、性器の内部が微細に動き、俺の性器を適度
に刺激する。

刺激が微細すぎて、射精する程ではないが、無視出来ない快楽を性
器に与え続ける。

自身の性器を思いつ切り打ち付けたいが、マナの身体を考えると難
しい。これでは生殺しだ。

脳味噌が沸騰しかけた最中、マナの唇が離れる。どうして…？そ
んな疑問の表情を浮かべる。

「痛みは引いた、大丈夫だから、ジンのやりたいように動いてくれ」

処女膜を失った痛みが引いたと、マナが宣言したが表情が引き攣っ
ている。

俺の限界を悟ったマナが気を使ってくれてのだろう。

そんなマナに「気にしなくていいから、もう少し休め」と伝えると、
否定の言葉を投げられた。

「私は魔族のハーフだから、ちょっとやさそつとは壊れない。

それに黙っているより、動いてくれた方が痛みが引くと思う。だか
ら、だから動いてくれ…」

そう告げた直後、マナが自らの腰を動かした。

拘束から逃れるような藻掻きに近い腰の動きだが、

自身の性器に耐え難い肉の感触が伝わり、思わず射精してしまっ
たことになる。

射精してしまいそうになる衝動を誤魔化すように、マナの腰に打ち付ける。

強く打ち付けた事により、自身の性器がマナの中に深く刺さり、行き止まりに到達する。

子宮だろうか？ともかく行き止まりに到達した瞬間に今まで以上の快感を感じる。

今の快感を再現しようと、自身の性器がマナの中からはみ出る寸前まで腰を引いた後に、

もう一度マナの腰に打ち付ける。マナがいったのか、獣の雄叫び様な絶叫を上げたと同時に、

マナの性器が万力のように絞める。突然の締め付けに、自身の性器がもうじき爆発のを感じる。

避妊具は当然付けていない。マナの中で射精してしまっただけは、妊娠してしまう恐れがある。

マナの中で射精したい衝動を必死で押さえながら、自身の性器をマナの中から出そうとした。

そうしようとしたのだが、マナの両手足が俺の身体に回り、蛇の様に拘束をする。

マナの拘束から逃れられない。

このままではマナの中で射精してしまい、妊娠させてしまっても知れない。

そんな危機感を感じるが、射精を押さえられる筈もなく、マナの中で果ててしまった。

今までの人生で最も多く、濃い精液を射精してしまったのか、尿道が焼けるように痛い。

俺の精液を受け入れてくれているのか、マナの中が吸い上げる様にウネウネと動く。

マナにとって今日は危険日なのか分からないが、この量だ。妊娠するだろう。

…もういいや、どうせ妊娠するならしっかりと種付けしたいし、

暫くは挿入したままにしよう。

そんな野良犬みたいな事を考え付き、マナの中に挿入したままの体勢で再び抱き付く。

「これは、妊娠して、しまった、な。責任は、とって貰うから、な。」

呂律の回ってマナが、そっと呟く。

射精寸前の俺を拘束するという行動をとったマナだったが、

その理由はもしかしたら、子供という明確な絆が欲しかったのかも知れない。

ああ、随分と寂しい思いをさせてしまった。そんなマナの頭を優しく撫でる。

我ながら気が早過ぎる気もするが、生まれるのは男の子と女の子のどちらがいいか質問する。

「男の子が良い。ライバルがこれ以上増えるのは勘弁だからな。」

ふふっ、ジンの息子が、きつと遅い子に育つだろうな。もしくはジン以上の変態かな……？」

随分と失礼な言い様だが、マナは男の子を望んでいるのか。

俺は女の子だな。男の子だったら、父親である俺を優に超えそうだから嫌だ。

そんな事をマナに伝えたら「小さい男だな」と言われ、綻んだ表情で笑われた。

十分に種付けも終わったし、マナの調子も大丈夫そうだ。

マナの中から性器を抜き出し、マナに回していた腕を解いて一時的に離れる。

ベンチに座り、自身の膝を枕にして、マナの頭部をそっと乗せる。

ふとマナの性器を見てみると、性器からマナの純血と自身の精液が溢れ出ていた。

溢れ出した純血と精液を指で掬い取り、もう一度マナの中に入れ、指で蓋をする。

自身の精液をマナに擦り付けようと、マナの中の内側を指で一周するようになぞる。

「やめ、ろ、ぬけ、ぬいてくれ!？」

指を挿入した時点で呼吸の浅かったかマナだったが、

内側をなぞる様に指を動かすと、止めるように懇願してきた。

そんなマナの態度に興奮を覚え、空いた片手で痛い程に腫れ上がった乳首を摘む。

更に攻めようと、マナに口付けをして、甘噛みをしながら思いつ切り舌に吸い付く。

性器、乳首、舌の三点責めに、マナがあっけなくイった。

「意味が分からん、どうしてさっきまで童貞だった男が、理不尽だろ…」

何度もイカされ続けたマナが悔しそうな声を上げる。

上手いか下手かは分からないが、攻める手数多いのは、それだけ攻められたってだけの話だ。

そんな独り言を思わず呟くと、マナが俺を攻め続けた相手が誰なのかと問い詰めるが、愚問だ。

一人しか居ないだろう。因みに奴は俺の心を完全に読んだりするので、

攻め方が的確だし、肛門だろうが喉奥だらうが躊躇なく攻めるので、尋常ではなかったのだ。

そんな事を思い出し、乾いた笑みを浮かべていると、相手に合点がいったのかマナが静かになる。

このまま行為の余韻を確かめようと思ったのだが、膝枕をされてい

たマナが立ち上がる。

イカされ続けて足腰に力が入らないのか、フラフラと反転した後に俺の股間に向かって倒れ込む。

おいおい大丈夫か？マナの体調を確かめようとした直後、自身の性器に刺激を感じる。

刺激の正体を確かめようと、マナの長髪を掻き上げ、横から自身の性器を見てみると、

自身の性器を一心不乱に舐め回しているマナの姿が映った。

自身の精液とマナの体液がこびり付いた性器、それをマナが舐め取る。

射精を終え、膨張が収まった性器だったが、再び聳え立つ。

性器の力り部分を覆っていた包皮を延ばし、カリと裏筋部分を外気に露出させられ、

その部分にもマナの舌が絡み付き、棒付きの飴を舐め回すように隅々まで舐め回し始めた。

性器を舐められている最中、マナの片手が睾丸まで延び、痛みと快楽の狭間の力で揉み始めた。

睾丸を揉まれた時の反応を窺われたのか、揉みただけでは終わらず、睾丸の一つを口に含める。

マナの口内に含まれた睾丸。まるで飴を舐めるように、睾丸を口内で転がし始めた。

その間、右手で俺の性器を扱き、空いた左手で自らの性器に指を這わせて快楽と自慰をしている。

此方に見せつけるように地べたに座って、大腿を開いているので、その模様がハッキリと見える。

性器に指を挿入する勇気がないのか、遠慮がちに指を這わせるだけなのが可愛い。

マナに性器を攻め続けられ、自らの性器から先走りの汁が溢れ出る。

その事にマナが気が付いたのか、睾丸から口を離し、性器の先端にしゃぶりつき始めた。

止め処もなく溢れ出る先走り汁と、尿道に貯まった精液を飲み尽くそうとしたのか、

マナが深い呼吸をした後に、睾丸の時みたいに性器の先端を口に含み、

ストローで飲み物を飲むみたいに、思いつ切り性器に吸いつき始めた。

射精を強制させられている感覚に、思わず腰が浮きそうになるが、マナが両手を使って制止する。

自らの限界まで性器を吸い、呼吸をする際は鼻で行い、一時だろが性器を口から離そうとしない。

性器に休息を与えず、常に吸われ続けているみたいだ。その所為で尿道が飛び出そうな激痛を感じる。

性器に激痛が走ると同時に、自身の性器が再び射精しようとする。

マナの口から性器を抜こうとしたが、マナの両腕が腰に巻き付き、離れられない。

それならば射精を我慢しようとしたが、腰部分に回された両腕の指が、自身の肛門まで延びる。

肛門まで延びた指が、躊躇なく進入する。マナが性器に吸い付いているのにも関わらず、

肛門に侵入した指から逃れようと、ベンチから立ち上がるかのように、腰を浮かせてしまった。

腰を浮かせてしまった事により、自身の性器がマナの喉奥深くまで到達する。

喉奥を突かれたマナが咳込んだ事により、喉奥が更に狭くなり、その衝撃で射精してしまった。

ツライ筈のマナだが、それでも腰に回された両腕と、肛門に侵入する手を緩めようとするしない。

その手が緩められたのは、自身の射精が完全に収まった頃だった。

射精が収まったのを見計らったのか、

マナの両腕による拘束と、指による侵入が解かれ、ようやくマナが生殖器から口を離れた。

生殖器から口を離れたマナが女の子座りになり、両手でつくったお皿に嗚咽を催す。

泡立ったジェル状の液体がマナの口からゆっくりと垂れ、両手でつくったお皿に溜められる。

両手に溜めてないで、そのまま地面に落としちゃえば良いのに……マナの行動に疑問を抱いていると、両手に溜められた精液を舐め始めた。

まるで犬が大好きなミルクを飲んでいるように、音を立てて舐めていく。

俯き加減でマナの表情は見えない、どんな表情を浮かべているんだろう？。見たいが見えない。

マナを褒めるために髪を撫でていると、溜めた精液を舐め終わったのか、マナが顔を起こした。

「っあ、はあ、はあ、すまない、粘り気が凄過ぎて一度には飲み切れなかったよ……」

別に頼んでいた訳ではないのだが、マナが申し訳なさそうな表情を浮かべて謝る。

そんなマナの異変に気が付き、思わず失笑してしまう。だって鼻から精液が流れているのだ。

まるで鼻から牛乳みたいだ。加えて、口元は乾いた精液でカピカピだし、酷い有様だ。

マナの顔が精液で汚れている事を伝えるが、顔面に精液の臭いを染み着かせたいので、

拭わなしてくれとお願いすると、呆れたのかマナが溜息を吐き、「変態だな」と罵った。

どうせ俺は変態ですよ。精液の臭いがマナの顔面に染み着くのを待ちながら、

他の場所にも精液の臭いを染み着かせようという悪知恵を思い付く。

射精を終え、萎えてしまった自身の性器をマナの胸に押し付け、お互いの体液の臭いを擦り付ける。

それだけでは足りないとばかりに、マナの胸に口元を寄せ、先程のお返しとばかりに舐め回す。

先程までの舐め方とは違い、自身の唾液でマナの身体を清めようという行為の所為で、

マナの胸が唾液でテカテカに塗れ、新たに舐め回す部位を求めて、胸から上へと移動する。

乾いた精液でカピカピとなったマナの口元を舌で拭き取ろうとする。

勢いで自身の精液を舐める形となってしまうたが、元は自分の身体から出たものだ、

少し苦みを感じるが、マナも飲み込んでいたので、深く考えるのは止めた。

マナの口元を舐め終わり、次は精液が垂れた鼻を目指す。

流石に鼻を舐められるのには抵抗があったのか、両手を使って離れようとするが、

同じく両手を使って押さえ込み、マナの鼻の穴を包み込むように口に加え、鼻を噛むように吸い付く。

精液の苦みと、マナの鼻水だろうか？塩気が強く、精液とは違った粘液状の物が口内に広がる。

もっと吸い付きたかったが、この行為が余程嫌だったのか、手足を力一杯に動かして逃れようとする。

素の腕力ではマナの方に軍配があり、これ以上の拘束を無理だと察し、掴んでいたマナの両手を解く。

両手の拘束を解いた瞬間、ご立腹だったのか腹部をマナに蹴られた。

「あり得ない、あり得ないだろ。」

女の子の鼻を吸うとか、度が過ぎるぞ！

こ、この、変態野郎が!!」

マナが俺を「変態野郎」と罵るが、

精液を美味しそうに飲んでいたマナにだけは言われたくない。

つてか、先程まで処女だった癖に、無駄にテクニシャンなのは どうしてだよ？

そんな質問をマナにぶつけると、本人にとって恥ずかしい質問だったのか、視線を逸らされた。

「まあ、その、あれだ、早乙女に無理を言って成人向けの同人誌を借り たんだよ。」

早乙女や朝倉達に囁し立てられたりしたが、その甲斐があつて上手くいって良かったよ」

女子中学生である早乙女が成人向けの同人誌を所持しているのは疑問だ。

つてか、マナは今までの行為を上手く言ったとか自己評価してるけど、失敗じゃね？

その事をマナに伝えると、妙な表情をされた。「失敗？何がだ？」と呟いている。

まあ、失敗は言い過ぎだが、同人誌は所詮創作なんだから、参考にするのはどうかと思うよ？

それとなくマナに伝えたが、気を悪くしてしまったのか、深い溜息を吐かれた後に

「変態が何を言ってるんだ？私が同人誌なら、ジンはAVの見過ぎだ」と反論された。「ごもっともです。」

行為を終え、そろそろ服を着ようとかかと考える。

ベンチの周辺に投げ散らかった二人分の衣服を回収する為に、

ベンチから立ち上がるうとしたのだが、マナに腕を引っ張られ、阻止される。

何々、どうしたの？予想外の阻止に驚きながらマナの方を向くと、再び視線を逸らされた。

「なあ・・・まだ時間はあるし、もう一度しないか？」

マナに行為の催促をされたが、残念ながら自身の性器は萎えている。

性器が立たなくては行為が出来ないので、マナの催促を断ると、再びマナが性器にしゃぶりつく。

マナが話しかけて来るが、性器を口に含んだ状態で話しかけられても、上手く聞き取れない。

話しかけた事によって口内が不規則に動き、与えられた快樂で会話ドロドロではない。

今日一日で何度も濃厚な射精をして、枯れたと思った性器が初回同様に熱り立つ。

その事に気を良くしたのか、マナが嬉しそうに熱り立った性器から口を離す。

与えられていた快樂が消え、思わず残念そうな声を上げてしまったが、これで終わりではない。

これからどんな行為が始まるのだろうか？期待に胸を膨らませてみると、

マナが突然立ち上がり、俺の膝の上に座り、太股で性器を挟み込む始めた。

「この体勢、昔を思い出さないか？」

背中を向けたままのマナが感傷深そうに呟く。

昔とは魔法世界での事だろう。そう言えば当時はこの体勢が多かった。

当時のマナは年相応な体格だったので、膝の上にすっぽりと収まっていたが、

そんなマナは今では立派な女性だ。

膝の上に座られると、以前の様に顎で頭を撫でる事が出来ない。

それに当時はこんなエロい座り方じゃなかった。

そんな成長に寂しさを覚えるが、今のマナじゃないと出来ないことがあるだろう？

というカツコいい(?)台詞を言いながら、背後からマナの乳房を揉む。

「それもそうだな。今出来る事を精一杯やらないと後悔してしまう。」

今度は私が動くから、ジンは絶対に動かないでくれよ。絶対だからな」

動くなと何度も忠告される。

色々と消費され続けていて予想以上に疲れているし、丁度良いや。

それにマナ自らが腰を振ってイかせてくれるってのは、非常にエロい。

出来れば向き合って見たかったが、背中しか見せない当たりにマナの初々しさを感じる。

そんな事を考えていると、マナが腰を浮かせる。

片手を使って俺の性器を真っ直ぐに固定して、挿入し易いようにしている。

固定された性器に腰を落とし、お互いの性器が密着して行き、ゆっくりと挿入される・・・

「っぐう、はぁっん、はぁ、はぁ……これは、キツいな。」

くぐもったマナの声が聞こえる。ツラそうだぞ大丈夫か？

マナのお尻を撫で回しながら、無理をしてないかと問い掛ける。

「二回目だから問題ない、では動くぞ。」

マナの腰が前後に擦られるように動き、その度に甘美な声が漏れる。

マナは気持ちいいみたいだが動き自体が小さく、一定ではないので、此方は生殺しみたいだ。

そんな不満を感じていると、マナが早々にいったのか腰の動きが止まり、身体全体が痙攣する。

俺の膝の上に乗っていたマナが、地面に向かって四つん這いで倒れ込み、お互いの性器が離れる。

「すま、ない、先にイって、しまった……我慢、出来なかつたんだ」

四つん這いになったマナが、犬みたいな浅い呼吸をしながら、

先にイってしまった事について謝罪している。

まるで土下座になって許しを乞っているみたいだ。

俺はサディズムなのだろうか？そんなマナの姿に更なる興奮を感じる。

お預けを食らってしまったのも合わさって、理性の限界だ。

もう、いいや、マナの身体を好き勝手に喰らい尽くそう……

「なにをするつもりだ!?お願いだ、止めてくれ、イったばかりなんだ」

四つん這いになったマナの腰を掴み、挿入し易い様に腰を固定する。

俺の行動で、これから何をされるのか悟ったマナが止めるように懇願するが、無理だ。

この場から逃れようと、這って動こうとするが腰を掴んでいるので、逃れられない。

誘ったのはマナからだし、勝手にいったのもマナだろう。

無責任に逃げようとするマナに苛つき、腰を掴んでいた手を離し、マナのお尻を叩く。

お尻を叩かれたマナが籠もった叫び声を上げ、叩かれるのを防ごうとしているのか、お尻を左右に振った。

本人は避けるつもりなのだろうが、その姿が誘っている様に見える、更にお尻を叩く。

お尻を叩かれ続け、遂にマナが失禁をした。

下腹部から尿が流れ、太股などを伝って地面に垂れる。

尿の臭いを纏った蒸気が発生して、マナの尿の臭いが鼻孔を刺激する。

「つう!?かくなあーかがないでくれえ!!」

尿の臭いを嗅いでいるのがバレたのか、マナが嗅がないでくれと泣きつく。

相当嫌だったのか、地面に顔を埋めて泣き始めた。

やり過ぎたみたいだが、終わらせる気はない。

限界まで熱り立った性器を静めようと、マナの腰を無理矢理固定する。

諦めているのか、抵抗する力がないのか分からないが、抵抗する気配を見せない。

散々いかせたし、二回目の挿入だ。前座も必要ない。一気にブチ貫かせて貰う。

深々と突き刺すような挿入にマナが雄叫びを上げるが、気にも留め

ずに深い挿入を繰り返す。

動物の後尾みたいな体勢、深々と挿入出来るが、相手の悶える表情が伺えないのが難点だ。

そんな不満を思いながら、悶え続けるマナの裸体を観察していると、小さな変化に気が付いた。

肛門だ。俺が腰を打ち付ける度に、マナの肛門が物欲しそうにピクピクと小刻みに痙攣するのだ。

性器は無理そうだが、指一本なら入るかも知れない。先程のお返しとばかりに、

マナの肛門に指を押し込むと、対して抵抗もなくマナの肛門に指が沈んだ。

肛門に指を突っ込んだ直後、マナの中がイッた時みたいにキツく締められる。

痛い程の締め付けに気を良くし、腰を打ち付けながらも、マナの肛門を攻め続ける。

挿入前から限界寸前まで熱り立っていたのもあって、もう射精してしまいそうだ。

一回目はマナの中に出したので、二回目は思考を変えてマナの裸体にぶっかけようとする。

マナの中から自身の性器を抜き出し、立ち上がって地面に伏せたマナに向かって射精する。

吐き出された精子がマナの裸体に降り注ぎ、白い液体が褐色の肌を犯していく。

……見事にやっちゃった。

性欲に身を委ね過ぎて、暴走してしまった。

マナは大丈夫か？地面に伏せたままのマナの安否を確かめる為に、力が抜けたマナをゆっくりと抱え、ベンチに座らせる。

「お、ほえて、る、よ…」

マナが恨み言を口にするが、口調と視線が覚束ない。本当に申し訳ない、後で何でもするから許して下さい。

そうマナに謝ると、覚束ない口調で「寝るまで抱きしめてくれと」お願いされた。

行為中は殆どのお願いを断ったが、行為中以外のお願いを断れる程の度胸とサドは持ち合わせいないので、

マナの身体をベンチに倒し、マナが寝付くまで力一杯抱き締める事にした。

お互いが満足するような行為を終え、

その余韻を抱き締め合いながら堪能していると、それをぶち壊す様な声が聞こえた。

「おい、貴様は一体全体何をしているんだ？」

「ジンさん、仮契約するのは認めましたけど、それはあんまりですよ」

エヴァンジェリンとネギの二人だ。双方服がボロボロで青筋を立てている。

二人とも決闘をしている筈じゃ・・・そう思っていると公園の電灯が付いていたのに気が付く。

いつの間にかメンテナスは終わっていた様だ。その所為なのか二人以外の顔見知りが見える。

いつから見られてたんだろ？ まあいつか。俺とマナの関係なんて周知の事実だし、

散々やらかした俺が今更になって世間体とかを気にするのも妙な話だ。

むしろ見せつけてやりましたよ。そんな考えが笑いとなって溢れ出る。

その笑いがお気に召さなかったのか、ネギとエヴァンジェリンが
一斉に飛びかかる。

俺は今回の戦いの唯一の負傷者として救護室に担ぎ出される事
となった。

第二話 常木とネギ

一日の締めはやっぱりお風呂だろう。

これさえあれば今日一日が地獄であったとしても耐えられそうな気がする。

そんな様な事を「別荘」の内部に設備された大人浴場で、ふと呟く。

数時間前の試合で、俺は絡繰に損傷を与えてしまった。

絡繰はロボットなので回復薬や魔法などで治療する事が出来ず、すぐさま絡繰の製作者である者に会おうと、別荘から出ようとしたのだが、

どうやら別荘は、内部の時間を遅らせる代わりに、24時間立たないとは出られないのだ。

機械は人間以上にデリケートなので、すぐさま絡繰を修理させたかったのだが、仕方がない。

絡繰が言うには、自己診断プログラムで調べた結果、左腕が曲がった以外に異常はないらしく、

絡繰に「常木先生は心配し過ぎです」と言われ、逆に絡繰に気を使われてしまった。

絡繰の一件が保留扱いになり、24時間が経過するまで別荘で過ごす事となり、

その過程でエヴァンジェリンの別荘の大浴場に浸かっている、という経緯なのだ。

(因みに絡繰を傷付けられた事に激怒したエヴァンジェリンとチャチャゼロが俺をリンチして、

絡繰の怪我が掠り傷だと笑えるぐらいの怪我を負わされてしまったのだが、

ルシエラとマナのお陰で、身体中が軋む程度の怪我で済んでいる。)

別荘の大浴場は、麻帆良学園の女子寮の大浴場に匹敵する程の規模

なのだが、

俺とルシエラ以外に別荘の大浴場を利用している者は居ない。ルシエラは別として、この世界に召還されて一人で大浴場に入るなんて初めてだ。

普段なら俺の入浴中には必ず水着姿の大河内が泳いでいて、その性的な姿に興奮していた。

大河内を襲わないようにと、自身の性欲と倫理が熱い戦いを繰り広げていたのだが、

此処は大河内が知らぬ場所なので、その戦いをする必要はない。

つか、着替え以外で全裸になったのって久しぶりだ。

なにせ俺の入浴中には必ず大河内が居て、こっちが入浴中だったのに全裸で要ると、

赤面して怒るんだもん。調子に乗って見せつけると大河内とルシエラに肅正されるし……

そういう訳で俺は入浴中にも関わらず水着着用の義務を言い渡されていたのだ。

全裸になれる絶好の機会なのに、全裸になれないと言う制限は、思いの外ストレスだったのだろう。その事に気が付き、思わず涙が

頬を伝う……

今現在は入浴前に身体を洗っている最中なのだが、一刻も早く湯船に浸かりたい。

いや、入浴中に女の子が居ないっていう、当たり前な状況なんだけど凄く安らぐ。

(やらしてくれない女の子と混浴とか、性欲を余らせるだけなので本当に迷惑だし。)

こんな安らぎが続くことを願う。本当に願う。

その為には、俺の入浴中に行われる大河内との水泳会を無くしたいのだが、

大河内は水泳に関しては一切の妥協を許さない頑固者なので、説得

するのは無理そうだ。

どうするか……いつその事、襲っちゃ……エヴァンジェリンの別荘でも紹介するか？

そんなアホみたいな事を考えていると、大浴場のドアが開かれる音がした。

俺が入ってるのは皆知っているだろうし、誰だろう？例のメイド達か？

身体を洗っている手を止め、大浴場の出入り口の方を向くと、そこにはネギが居た。

ああ、ネギか。メルディアナ時代では、ネギと頻繁にお風呂に入っていたので、

此方が慌てて陰部を隠す必要も、遠慮する理由もないので、手招きしてネギを隣へ誘う。

「あつ……どうも、身体は大丈夫ですか？」

ネギが此方の身体を労ってくれているのだが、

マットタイプの浮き輪と、小さなポーチを脇に抱えているので、そちらに注意が向いてしまう。

さては人が居ない大浴場を狙って、大河内みたいに泳ごうとしたのだろう。可愛い奴だな。

マットタイプの浮き輪で思い出したが、ネギは未だに泳げなかったのだった。

地理条件を問われない魔法使いが泳げないと言つのもアレなので、そろそろ泳ぎを教えないと……

そんな事を思い浮かべながら、脇に抱えた浮き輪について茶化すと、ネギが赤面して否定する。

「浮き輪？違います！勘違いしないで下さい、これは浮き輪なんかじゃないです！」

ネギが赤面して、浮き輪じゃないと否定するが、脇に抱えたビニール製品は、どこからどうみても浮き輪だ。だが、ネギが浮き輪じゃないと否定するなら、騙されてやるか。父親みたいな笑みを浮かべていると、機嫌を悪くしたのか、浮き輪を床に置いた後に、俺の隣の椅子に腰を掛け始めた。此方も身体を洗っていた手を再開させたが、ネギが俺の股間部分をチラチラと覗き始めた。どうしたのだろう？俺の股間に異常にあったのか？自身も確認するが、特に異常はない。ネギの視線の動きが不可解だったので、ネギの方を向くと、不満げそうなネギと目が合う。

「ジンさん、僕の身体を見てなんか来ませんか？」

不満げなネギに不可解な質問をされる。

ネギの身体を見て、違和感を感じないかって事なのだろうか？

改めてネギの身体をしてみるが、違和感や異常などを感じない。

異常とまではいかないが、ネギが綺麗な長髪を大河内みたいに残る手に縛っている程度だ。

ネギの質問の答えが、髪型を変えたことだと思って答えると、不機嫌そうな表情が際立つ。

「変化という意味では合ってますけど違います。」

ほら、こう…僕の身体を見てムラムラしないんですか？」

またもやネギが不可解な質問をする。

むらむら？ムラムラって性的に興奮してるかって事か？

俺がネギに性的興奮を覚える？そんな事が起こるわけがないでしょ。

ネギと俺の年齢の差は一回りも違うし、ネギの体付きは良くも悪くも年相応だ。

それ以前に、俺とネギは常日頃から一緒に居たので、お互いの裸は見慣れているし、

俺とネギの関係は従者関係なのではなく親子、もしくは兄と妹の関係に近い。

自分の娘や妹に性欲を感じる訳がないし、ましてや対象が幼児体型なら尚更だ。

それでも俺にムラムラして欲しいのなら、生徒達ぐらい成長してからにしてくれ。

と、どこまでが本気の発言か分からないように、含み笑いをしながらネギに伝える。

俺の発言に怒ったのか、溜息を吐いた後にネギがルシエラの名前を呼ぶ。

「ルシエラさん、ジンさんが僕にムラムラしているか教えて下さい」
(私が答えるまでもなく、御主人様はネギ様の裸体に性的興奮を覚えてい m . . . ぐぎゃ!?)

ルシエラが念話で法螺を吹き始めたので、思いつきり拍手をしてルシエラを叩き潰す。

止めるのが遅かったのか、ネギを見てみると、先ほどの表情から一転して機嫌が良さそうだ。

嬉しそうなネギを見ていると興奮してないですよと、否定しづらい。

まあ、アレだ、俺がネギに対して性的に興奮していたとしても、他の生徒達と違って、

邪険に扱われたり、青服に通報される心配はないので、否定しなくてもいいや。

溜息混じりでそう考えていると、ネギが俺に向かって不意を突くようなキスをし始めた。

お互いの唇がそつと触れ合うだけの、優しいキス。

一瞬だけ本契約かと思ったが、魔法陣がひかれている様子もない。それ以前にネギの年齢では仮契約は出来ても、本契約は出来ない筈だ。

ネギの行動に驚いていると、ネギの唇がゆっくりと離れ、驚愕の発言をする。

「それじゃあ、僕とSEXしましょう。好きなだけ突いて下さいね」

ネギが口元から八重歯と小さくて赤い舌を出してはにかむが、状況に付いていけない。

えーっと、その、ネギはなんて言ったんだ？俺の耳が正常だったのなら「SEX」と聞こえたのだが・・・

まさかなあ、そんな訳がない。いくらネギが耳年増だからって、常識と倫理は理解している筈だ、

だからネギが俺に性行為をお願いするなんてありえない。そう言い聞かせていると、

ネギが俺の股間部分に跪き、俺の性器を可愛い両手で掴み始めた。

性器をネギの温かくも小さい手によって刺激され、思わず勃起してしまいそうになる。

マナならともかく、ネギに勃起した性器を見せる訳にはいかないのだ、

咄嗟にネギの両手を掴んだ後に、ネギの後頭部に向けて軽く頭突きをする。

「痛っっ!!もっ、行き成りなにをするんですか?」

ネギが痛そうに後頭部を擦って抗議をするが、抗議をしたいのは俺の方だ。

お前はナニをしてんだよ!?思わず、ネギを「お前」呼ばわりして問い詰める。

「十二をしてるって、そんなのSEXの前座に決まってるじゃないですか…」
「恥ずかしいから言わせないで下さいよ。あっ、もしかして、そういう類のプレイでした？」

俺の問い詰めをプレイだと勘違いしたネギが小首を傾げるが、そうじゃない。

なんで10歳にも満たないネギが性行為を知っていて、それを俺に強要するんだよ！

あと「SEX」とか簡単に言うな、俺だって性行為を「SEX」って言うのが恥ずかしいんだよ!!

女の子なんだから、「SEX」じゃなくて、「えっち」って言うてくれ!!!ってか言うな!!!

思っていた事を早口で捲し立てると、綻んでいたネギの表情が一変して真剣になる。

「僕がSEXを知ってるのはジんさんが好きだからで、

僕がジんさんとSEXをしようと思ったのも、僕がジんさんを好きだからです」

ネギが真剣な表情になったので、何を言うかと思ったが、全く説明になっていない。

将来、ネギの婚約者に向かって「お父さんと呼ぶな」とか「お前に娘は絶対にやらない」

とかを言ったりするのが俺のささやかな夢だったのだが、なんだこれ? どうしてこうなった?

出会った当初は聡明(今でもだけど)だったのに、いつから俺みたいな変態になったんだ?

ネギが変態になった時期は分からないが、これだけは言える。俺が全ての元凶だと。

これじゃあ育児放棄の方がマシだろ、その後悔(?)していると、ネギが再び股間に手を伸ばす。

油断も隙もない。そんなネギの頭を叩くと、ネギが声を荒げ、大浴場中に反響する。

「なんでマナさんを受け入れて、僕を受け入れてくれないんですか!？」
久しぶりに見せるネギの激昂に圧されないように、此方も反論する。

俺達の年の差を考えろ、俺達の間隔を考えろ、まるで喧嘩のようにネギに伝えたのだが、
「恥ずかしながら俺とネギでは語彙力や頭の回転などが違うので、即座に反論された。」

「年の差? 関係? なんですかそれ?」

生徒であるマナさんに手を出した癖に、良識人ぶらないで下さい。
それに僕の名前は「ネギ・スプリングフィールド」で、常木姓ではありません。

つまり僕達の間隔は親子や兄弟ではなく、あくまでも他人でしょう。違いますか?」

ネギの反論に対する言葉が出てこず、思わず唸ってしまった。

確かに俺はマナに手を出した、その時点で俺とネギの年の差は言い訳にもならない。
それに俺とネギは親子でも、兄弟でもなく、ただの従者関係を結んでいるだけだ。

その従者関係も自身の意志で結んだ契約なので、所詮は契約に過ぎず、そうなる与他人だ。

ネギの言っていることは正しいのかも知れないが、酷過ぎる。

何年も一緒にいて、ネギの為に色々と努力をしたのに、「他人」だと

言われるのは惨い。

「他人」だと言われたのが相当堪えたのか、目頭に涙が集まり視界がボヤケる。

お風呂にはいつていないのに湯冷めをしたのか、頭がぼつとする。

急に体調が悪くなったので、大浴場から出ようとした最中、ネギに腕を掴まれて止められた。

「どうして何時も僕の話最後まで聞かないで、早とちりしちゃうんですか!?

良いですか?一度しか言わないので、最後までちゃんと聞いて下さいよ……」

絶望にしている俺に向かって、これ以上なにを伝える気なんだよ?そんな事を思いながらも、深呼吸をするネギを見据えていると、またもや衝撃的な事を言われた。

「僕達は親子でも兄弟でもありません。」

だから僕達はSEXが出来るし、結婚だって出来るんです!!」

ネギの叫びが大浴場に木霊する。

……アレ?聞き違いか?もしかして俺って求婚されたの?

そう質問すると、赤面したネギが首を弱々しく縦に振って肯定する。

お……おう?お、お、おお?突然の事態にまともな言葉が出ない。ネギ自身も相当恥ずかしいのか、黙り込んでいる。

先ほどとは打って変わって大浴場が静寂に包まれるが、ある人物の一言で静寂が壊れる。

(それでは、始めて下さい。ああ、私の事は気にしないで下さい。

精々御二人の行為をビデオに収める程度なの……ふにゃにゃ!?)

またもヤルシエラがほざき始めたので、今度は蛇口から出る水で手洗いをする。

蛇口からの水攻め、擦り揉まれる攻撃によってルシエラが可愛い断末魔を上げた。

ネギからの了承を得て、ルシエラが嘸し立てるが、俺とネギが性行為をするのは無理だろ。

無駄に巨漢である俺の性器は大きく、ネギの手首程度の太さはあるのだ。

その手首程度の太さの性器を、ネギの未成熟な性器にねじ込んだら、間違いなく裂ける。

その事をネギに伝えて、諦めて貰おうと思ったのだが、ネギがドヤ顔を浮かべ始めた。

「ジンさんは知らないんですか？」

普通のSEXなら僕のお股が裂けちゃうかも知れないですけど、

お尻の穴なら、十分な前座を行えば僕でも身体の負担を掛けずに行えるんですよ！」

ネギが膨らみかけた胸を張って自信満々に説明するが、俺は思わず頭を抱える。

ネギヤルシエラ、ネカネさん、高音といい俺の親しい人達はどうして変態になるのだろう？

この件については後日、シャークティ先生に相談するとして、今はネギの暴走を止めよう。

ネギが「肛門で性行為を行えば、幼い女の子とも怪我無く出来るんです」と熱弁しているが、

ハッキリ言おう、意味不明だ、信じるな。何処の情報を見たのかは知らないが、悪質も悪い所だ。

ネギの暴走を止めようと発した言葉だったが、本日二度目の衝撃発言で啞然とする。

「まあ、嘘じゃないですよ。アルに教えて貰ったネットの動画では、僕と同じくらいの年齢の女の子がソレでやってたんですけど、大丈夫そうでしたよ?」

使い魔である白いイタチの名前を叫ぶが、逃げたのか姿を見せる気配がしない。

ロリレイプの動画とか、グロテスク動画以上に見せたら駄目な動画だろうが、

それなのに、アルの野郎は幼気なネギに見せてんだよ、正気を疑うぞ?

アルは素揚げにするとして、その動画の配信元を潰さなくては…卒業生に頼むか?

これからその動画以上の事をするかもしれないのに、そんな事を考えてしまった。

これからネギと(お尻の)性行為が始まるのだが、乗り気じゃない。

…ルシエラやマナとの性行為から、性行為が素晴らしい行為だと気が付かされ、

それこそ一日中したいぐらいなのだが、こんなに盛り下がる性行為があるとは…

出来ることなら逃げ出したいが、俺の身体はネギが持ってきた浮き輪の上には寝転ばされ、

ルシエラの操影術によって、性器以外を影で覆われる事によって拘束されている。

いくら頭の中でルシエラに止める様に言っても無視されるし、ネギに言っても同様だ。

俺の要求を無言で拒否続けているネギの口は、俺の性器を刺激する事に集中している。

せめてもの抵抗で勃起する事を我慢しようとしたのだが、ネギの小さな舌先が尿道口を刺激した時点で、呆気なく勃起してしまった。

攻め方がルシエラに似ている。もしかしてルシエラに俺の弱点を教わったのか？。

自身の舌捌きで勃起させたのが嬉しかったのか、ネギが勃起した性器に頬ずりし始めた。

頬ずりだけでは終わらず、性器に鼻を押しつけてくんつくんと臭いを嗅ぎ始めた。

猫が木天蓼の臭いを嗅いで酔っぱらうように、ネギの表情がうっとりとする。

「ジーンさんの臭いの全てが凝縮されてるみたいですね。」

前から嗅いでみたいと思ってるんですけど、此れ程だとは、下着の比じゃないですね……」

ネギが洗いそびれた性器の臭いについて感想を述べる。

今の台詞を聞く限り、ネギはかなりの臭いフェチだったようだ。

そう言えば、メルディアナでは俺の下着だけが頻繁に行方不明になっっていた気が……

当時は思い当たるのがルシエラしか居らず、趣味が少ないルシエラに考慮して、

半ば黙認していたのだが、まさか犯人がネギだったとは驚きだ。

ってか、下着が盗まれ始めたのが6年ぐらい前だったから、その時点から既に変態だったのか。

……あれ？って事はネギが変態になった原因って俺じゃないのかな？

性器の臭いを無我夢中で嗅いでいたネギだったが、

俺の冷ややかな視線で我に返ったのか、再び性器を舐め始めた。

今度は尿道を舐めるのではなく、性器の先端を口に加えようとしますが、

ネギの小さな口に対して、性器が大き過ぎたのか巧く加えられないようだ。

性器の先端を加えるのを諦め、裏筋部分に舌を這わせ始めた。

マナヤルシエラといった成熟した舌ではない、ネギの未成熟で小さな舌は

成熟した舌では到達出来ないような裏筋の窪み部分の奥底を舐める事が出来る。

その事にネギも気が付いたのか、裏筋の窪み部分に舌を突っ込み始めた。

未知なる刺激に腰が浮きそうになるが、ルシエラの操影術が身体を固定する。

もうすぐで射精してしまう。射精の衝撃に耐えようと歯を食いしばっていると、

ネギの手と舌が性器から離れ、先ほどまで感じていた快樂が止まる。

もう少しで射精出来たのにどうして止める!?これでは生殺しだろう。

ネギに向かって非難と困惑の眼差しを向けたのだが、ネギは微少を浮かべた。

「ジンさん、イきたいですか？」

ネギが分かり切った質問をする最中、

自身の性器がネギにそっと握られ、ゆっくりとシゴかれていく。

弱々しい握り方に、とてつもなく遅い上下運動。性器に刺激が伝わるが射精には程遠い。

もっと強く握り、もっと速くシゴいてくれれば直ぐにでもイけるのだが、焦らされていく。

俺が踏ん切りを付けて「イきたいたい」と言えば、直ぐにでもイかせてくれるのだろう。

一回りも年が離れたネギに攻められているのだが不思議と羞恥心や屈辱は感じない。

ましてや世間体を取り繕う気も起こらない、あるのはネギに対する性的な欲求のみ。

俺はネギの質問に躊躇無く「イかせて下さい」とお願いした。

ようやく踏ん切りを付け、その選択にネギが満足したのか、ネギの性器を掴む力と、性器をシゴく速度が急激に上がる。

突然の強弱に対応出来ず、突然尿道から熱い液体が流れる感触が伝わる。

射精だ。そう認識した直後、自身の身体が痙攣した後に、性器から精子が吐き出される。

「ふあっ!? ……これが射精ですか？ 凄くネバナバして、熱くて臭い…」

吐き出された精子がネギの顔面に直撃をして、可愛らしい悲鳴を上げる。

流星に生で射精と精液を見たことがなかったので、驚いている表情を浮かべているが、

精子について嫌悪感を感じていないのか、顔面にかかった精液を指で掬い取り、

精子の感触を指先で確かめたり、目元まで近付けて凝視したり、臭いを嗅いだりしている。

精子の観察を終えたのか、指に付いた精液を躊躇無く口に含み始めた。

「んっぐっ ……くちゅ、くちゅ ……はあ、はあ、精子って美味しいんですね。

もつと飲みたいですけど、幾らジンさんでも精子は無限じゃないし、自制しないと・・・」

口に含まみだけでは終わらず、じつくりと味わう為なのか精液で口内を濯ぎ始めた。

俺もマナとの性行為中に悪ノリで精液を口に含んだことがあるが、味は生臭くて苦い。

とてもじゃないが美味しいとは思えなかったが、精液を口に含んだネギの表情は、

アルコールを一気に摂取した時みたいく、頬を赤らめて目の焦点が定まっていない。

此方が乗り気なのをルシエラが悟ったのか、

いつの間にか自身を拘束していた操影術は消えていた。

これで自由に身動きが出来る。上半身だけを起こし、ネギを胸元まで寄せる。

お互いの胸が触れ合うような体勢で抱き合い、先程のお返しとばかりにネギにキスをする。

ネギにされた唇が触れ合うだけのキスではなく、相手の口内に入るキスを披露する。

当然ながら荒々しいキスをしたことなどないネギが、四肢を使って離れようとするが、

ネギの細腕で、悪意を持った俺の拘束から逃れられる筈もなく、俺の身体にマッサージのような心地よい刺激を与えられるだけで終わる。

ネギの口内に舌を押し込み、

甘噛みしたら千切れそうなくらい小さなネギの舌に絡ませながら唾液腺と口内の上部分である硬口蓋を重点的に攻める。

ネギの唾液腺を舐めて刺激すると、唾液腺からネギの唾液が溢れ出た。

溢れ出た唾液を口に含むと、ネギの口内を吸うと、果実のように甘い液体が口内に広がる。

その味を更に得ようと、ネギの唾液腺を再び刺激して、もう一度吸い付く。

これを飽きるほど繰り返し、ネギの唾液を自身の舌が覚えた頃合いを見て、

唾液のお礼とばかりにネギをイカそうと、硬口蓋を攻めようとする。

硬口蓋は自分自身で舐めてもこそばゆい感覚がするぐらい敏感な所だ、

その地点を執拗に舐められ、ネギがいったのか身体を弓なりに逸らす。

「ふぎゃあーな、コレ？おしっこ、おしっこ、とま、ら、にゃい!？」

ネギがいったのに満足して口を離すと、初めていったのか動揺している。

エロ動画を見ているぐらいだから自慰ぐらいはしてると思ったが、相変わらずのアベコベだ。

ネギが目尻に涙を溜めながら尿だと勘違いしているが、それは尿ではなく正確には…

ネギの反応に訂正していると、自身の股付近から温かい液体が流れているのを感じ取った。

鼻孔に刺激する臭いから、ネギが本当に尿を漏らしてしまったのを悟った。

ネギがいった拍子に漏らしたが、幸いながら此処は大浴場で、大した問題はない。

ネギと俺をシャワーで洗い流した後に、マットタイプの浮き輪にネギを転がす。

ネギが大浴場に入る際に小脇に抱えていたポーチを手に取り、

チャックを開ける。ポーチの中には案の定、小瓶が入っていた。パッケージを見てみると、横文字で何かが書かれていた。どうせ英語だろう。

嫌気が指しながらもルシエラに訳させると、小瓶の中身が「ローション」だというのが分かった。

これからネギの肛門を使って性行為をするので、このローションを使って肛門をほぐすか…。

マツタイプの子宮に伏せ、小さく痙攣しているネギのお尻に顔を近付ける。

ネギのお尻の臭いを嗅いでみると、シャワーで洗い流したのにも関わらず尿の臭いが微かにした。

ローションを使う前に、念入りに消毒しないと。

そう思いつき、伏せていたネギを反転して仰向けにさせる。

仰向けになり、性器を晒したネギの股に顔を近付け、性器を中心に舐め回していく。

性器を舐められるという異次元の感触にネギが抵抗するが、お構いなしに舐め回す。

自慰を行わないネギの性器は、キチンと洗えているとは言えず、

性器を広げて舐め回していると、性器に恥垢が溜まっていたのか、酸っぱい味がする。

それらを丹念に舐め取っていると、ネギが俺の後頭部を殴って停めさせようとする。

気や魔法を使わないネギの腕力は年相応なので、然したる抵抗にならず、俺を興奮させるだけだ。

ネギの抵抗に興奮を覚えながら恥垢を舐め取っていると、またもやいったのか、

自身の頭部がネギの太股に挟まれ、絶叫を上げながら、性器から潮が噴かれる。

頭部を太股で挟まれ、ネギの性器に密着する形で固定されたので、潮吹きをモロに浴びる。

潮吹きと言っただけあって、微かに塩味がする。尿みたいな苦みや、恥垢のような酸っぱい味ではない。

ネギがいき終わった事により太股の力が弱まり、拘束が解かれる。ネギの身体に覆い被さるように這って動くと、ネギが恨めしそうな表情を浮かべていた。

「マナさんの忠告の意味がようやく分かりました・・・ジンさんって本当に変態なんですね」

ネギが変態呼ばわりするが、今更過ぎて否定する気すら起こらない。

まあ、ネギやマナ達にとって俺は（変態の）師匠だから、俺が秀でているのは当然だ。

ところで、これでお互いに一回はイッたし、今日のところは解散にして本番は後日にする？

そんな事をネギに質問したら、ネギが首を勢いよく左右に振る。

ネギの心身を労ったが故の提案だったのだが、喰い気味に否定された。だよな・・・

性器舐め出忘れてたけど、これからネギの肛門に挿入を行うので、入念にほぐしていかない・・・

ネギの肛門をほぐす為に、ネギに浮き輪の上で四つん這いになる様に促す。

ちよつとは抵抗すると思ったのだが、ネギが躊躇無く四つん這いになるのだが、

いきすぎた影響なのか、これから行われている事に怯えているのか腰が小刻みに震えている。

まるで生まれたての子鹿みたいだ。そんなネギのお尻を撫で回すと、一瞬だけビクついた。

・・・本当にや、いや、ネギや一度実行すると言ったら絶対に実行する子だから愚問だよな。

四つん這いになったネギの前に座り、
ネギのお尻に両手を置いて肛門を舐めやすくする為に左右に広げ
る。

お尻を広げた事により、ネギの肛門が露出される。可憐な少女は、
肛門まで可憐だった。

一輪の菊の花みたいな肛門ながら、ネギの肌に合わせて白い菊の花
を咲かせている。

肛門が外気に触れた所為なのか、肛門がピクピクと小刻みに引きつ
いている。

試しにと肛門に息を吹きかけたら、肛門が締まり、ネギが悲鳴を漏
らした。

観察は後日にして、そろそろ始めよう。

そう決心して、ネギの肛門に口元を近付け、舌を這わせていく。

単純に舌を這わせるのではなく、ネギの肛門の皺に沿って、一本一
本丹念に舐め這わす。

肛門の皺一本を舐め這わせる度に、ネギが悲鳴を漏らし、足腰が小
刻みに震える。

肛門を舐められたくないのか、お尻を左右に振り始めた。

この作業を怠ると、挿入時にネギの肛門が傷付く恐れがあるので、
非情ながら拘束を強める。

ネギの肛門を十分に舐め這わせ終わり、次の段階に移る。

果実みたいなネギのお尻に思いつきり吸い付き、肛門に舌を挿入す
る。

肛門に異物が入り込むという新体験に、ネギが掠れた声を上げる。

ネギが声を上げたのと同時に、肛門が異物を押し返そうと締まり、
舌が圧迫される。

肛門が激しく締まるのは、ネギが肛門に挿入される感覚に慣れてい
ないからだろう。

これが舌だからよかったが、俺の性器なら肛門を痛める事になって

居ただろう。

実際に俺の性器が挿入される前に、肛門が挿入される感覚に慣れるように、

肛門に挿入していた舌を前後左右に動かして、疑似的な性行为をしようとする。

陸に揚げられた魚のように激しく舌を前後左右に動かしていると、肛門だけでいったのか、四つん這いになっていたネギの腰が浮き上がる。

腰が浮き上がった事になり、ネギのお尻が口から離れ、肛門から舌が出される。

腰を浮き上がらせネギだったが、もはや足腰が立たないのか、マツトタイプの浮き輪に無造作に伏せて、手足を投げ出している。

そんなネギの肛門を見てみると、肛門が完全に閉じきっていないのか、

小指一本程度の小さな穴が開かれ、その穴から肛門内部が窺える。白い菊の花だった肛門が、舌の蹂躪により真っ赤な花を咲かせていた。

舌の次は、ローションを馴染ませた指を挿入させようと思ったのだが、

ネギの肛門を見る限りでは、その段階移らずに本番を迎えても大丈夫そうだ。

ポーチから取り出したローションを自身の性器と、ネギの肛門に馴染ませていく。

これで全ての準備を終え、最後にネギの了承を得ようとする。

「よ、しやくですか…もう、すきにしてください」

力なく伏せたままのネギだったが、それでもやる気はあるらしく肯定を得た。

今更だけど大丈夫だよな？そんな懸念が立ち込めるが、俺もこれ以

上の自制はキツイ。

もしもネギを傷付けてしまっても、ルシエラと御札があるし大事に至ることはないだろう、

ネギを傷付け、満足いかない結果に終わってしまったら、本気で切腹でもしよう。

そう決心した後に、伏せているネギを反転して、お互いの表情を見合える様な体勢にする。

ネギに負担が掛からないように、正面から挿入しようとする。

今にも壊れてしまいそうな小さなネギに覆い被さるように抱き締め、

手探りで自身の性器を弄り、先程までの執拗な攻めで弛まった肛門を目指す。

入念な前座や、ネギが持っていたローションが功を奏したのか、すんなりと挿入されたが、抵抗無く押し込めたのは最初だけで、突然自身の性器が万力の様な力で締め付けられる。

肛門に挿入されたネギが激しい呼吸音を漏らす。まるで過呼吸だ。

大事に至ってしまったと思いい、覆い被さっているネギの表情を浮かべようと、腰を丸める。

性器を締め付ける感触から、肛門の挿入に痛がっていると思ったのだが、

予想に反してネギは見事なヨガリ顔を浮かべる。まさに排泄を堪えているみたいだった。

もしかして感じているのか？ネギに向かって質問するが、

此方の声が聞こえていないのか、ネギの口から俺の名前を含んだ激しい呼吸音が漏れるだけだ。

予想以上に感じ過ぎていてネギの素質に唾然としてしまうが、取り敢えずは大丈夫そうだ。

それでも極力ネギを傷付けないように、性器の出し入れを排泄みだいにゆっくりと行う。

性器を肛門に押し込んでいた時のネギの表情は普通に悶えているだけだが、

性器を肛門から抜いている際のネギの表情は至極だ。

本当に大便を漏らしてしまったみたいな表情を浮かべ、俺の胸を叩いて見るなど訴えてくる。

ネギの訴えを聞き入れず、ゆっくりながらネギの奥深くへと性器を押し進め、抜き出す。

押し寄せる快楽に夢中になったのか、叩かれていたネギの手が止まる。

ゆっくりとした出し入れだが、如何せん肛門の締め付けが強く、今にもイってしまいそうだ。

どうせならネギと一緒にいきたい。性器を出し入れする速度を本の少しだけ速め、

ネギの性器と乳房に手を置き、陰茎と乳首を集中的に弄っていき、その度に肛門が断続的に締まり、ネギが浅い悲鳴を漏らす。

自身の性器が膨張し、尿道から熱い液体が溢れ出るのを感じる。

もう限界だ。最後の抵抗とばかりに、ネギの奥底で射精しようとする器を押し進める。

ネギの奥底まで性器を押し進め、行き止まりにぶち当たった拍子に射精してしまう。

尿道が焼き切れるのでは、と錯覚させるぐらいの量と熱をもった精液が放たれ、

ネギの体内を自身の精液で塗り潰していくような錯覚を感じる。

ネギの肛門で果て、萎えた性器をゆっくりと引き抜く。

肛門から性器を引き抜いた際に、蓋が外れたかの様に肛門から泡だった精液が溢れ出る。

性器で攻め続けられて、肛門が締まらなくなったのか、溢れ出る精液が止まる気配がない。

ネギの顔色を窺うと、幸せそうな表情を浮かべながらゆっくりと目を閉じて、眠ってしまった。

これじゃあ最後の別れみたいだ。そんな不謹慎な事を思い浮かべながら、億劫な身体を起こす。

俺とネギの身体をシャワーで簡単に洗い流し、ルシエラから取り出したタオルで

ネギを包み込んだ後に、お姫様抱っこをして大浴場から出ようとする。

さてと、ネギの着替えの場所とか、ネギが寝た事に関する言い訳とかどうしようかな……

適当な言い訳を考えながら大浴場から脱衣場へと通じるドアを開く。

すると、脱衣場に見知った顔触れが確認出来た。

第三話 常木とマナと桜咲

「ひゃあ、あっ、あっ、んっっ、や、やめっ、やめてくれ」

月明かりが差し込む一室に肉を打ち付ける音と少女の悲鳴が響く。細身の男と褐色肌の少女が後背位で性行為をしているのだが、そこに愛は感じられない。

少女は男に一方的に襲われているのか、少女の表情は泣き崩れ、絶望感が漂っている。

少女が泣きながら行為を止めるように懇願するが、男は聞き入れようとはせず、

少女の性器に自身の性器を打ち付けるのを止めようとしぬい。

「気持ちよそっすな声を上げといて」止めて「なんて言っても、説得力がないんだよ。

俺に襲われて興奮してるんだろ？そっすんだろ？おら、泣いてないで答えるよ！」

「ちっ、あっ！、ちがう、お前、あん！、なんか、で、気持ちよく、んっ！、なるか！」

少女の懇願に苛ついたのか、男が腰を乱暴に打ち付けながら罵倒する。

罵倒された少女は心外だとばかりに抗議をするが、言葉の端々に喘ぎ声が漏れている。

男が腰を打ち付ける速度を速めていき、それに伴って少女の喘ぎ声が増す。

「いや、いやだ、いやだいやだ、いきだぐない、いきだぐないんだ」

少女が達しそうになったのか、手足を振って抵抗を始めるのだが、

少女の四肢は鋼鉄で出来た枷で拘束されているので、逃れることは出来ない。

むしろ少女が暴れる事によって行為がスムーズに行かず、男を逆上させてしまった。

「うげえんだよ、便器は便器らしく黙ってるー！」

男が四つん這いになっていた少女の喉を掴み、強制的に黙らせようとする。

少女の抵抗は収まったのだが、少女の喉を掴んだ手が離される気配はない。

少女の喉を掴んだ事で性器の締めりがキツくなり、その感触を楽しもうとしているのだ。

首を絞められたままの少女が咳込むが、それでも男の手が少女の喉を離れることはない。

男も限界に近いのか、腰の動きは一層激しくなっていく、

ようやく限界に達したのか、止め処もなく続いていた腰の動きが止まる。

避妊なんて微塵も考えていないのか、男が躊躇なく少女の中で射精をする。

射精を終えたのか、男が少女の喉から手を離し、自身の性器を少女から抜き出し、

用済みとばかりに男が少女の元から離れ、支えを失った少女が床に崩れ落ちる。

窒息寸前まで首を絞められ、精液で中を汚された少女は失禁しながら気絶をしていた。

数々の乱暴を受けていた少女だったが、その表情は幸せに満ち溢れているように見えた

取り敢えず死にたい、ってか殺して欲しい。

女子寮内のマナの自室で性行為をしたのだが、冗談抜きで死にたい気分だ。

こうなったのも全て、俺がマナの戯れ言に乗っかってしまったからだ。

マナが我慢が出来ないからと、女子寮内の自室に連れ込まれたのはまだいい、

消音系の魔法を施せば、マナの喘ぎ声が隣の部屋に漏れる心配はない。問題はその後だ。

マナが怠慢期対策だと、シチュエーションセックスを誘われ、やる羽目になったのだ。

そして渡された台本、という名の同人誌の内容が見事な「鬼畜、レイプ物」だったのだ。

つまり先程の性行為での行動と罵倒は、全て台本(同人誌)通りだったのだ。

(先程までの行為は全て台本通りだと言い張りたい。アレは断じて俺ではない。)

台本通りとはいえ、マナの首を失神寸前まで絞め、あんな暴言を吐いてしまうとは…

「私は楽しかったのだが、ジンは気に召さなかったのか？」

半ば放心状態の俺を心配したのか、マナが水の入ったコップを手渡された。

手錠で赤くなったマナの手足から目を逸らしながら、差し出されたコップを手にする。

恐る恐るマナの顔色を窺うと、あの行為で満足いったのか頬を綻ばしていた。半端ねえ。

襲われて喜ぶなんてマナは真性の変態だな、そう軽口を叩こうとしたのだが、

斯く言う俺も終盤はノリノリでマナを犯していたので、言うに言えない。

マナの質問には「勘弁して下さい」と力なく答えた。そもそも怠慢期対策早過ぎだろ。

「むっ、それじゃあ次は普通にやるか」

あのマナが一回で満足するとは思っていなかったが、二回戦目があるとは…

そもそもマナとの初めての性行為が…今から大体48時間ぐらい前なのだ、

俺はその間に二人も抱いて、合計で10回ぐらいは射精しているのだ。

精力は魔法薬で補っているが、精神的にはツライので今日は止めにしたいのだが…

そう提案しようとした最中、頭上から聞き慣れた少女の声が出た。

「あの…もしかして、まだやるんですか？」

明日は早いので、いい加減に寝たいんですけど…」

二段ベットの上部から顔を覗かせた桜咲が、苛立った表情で恨み言を口にする。

俺達は女子寮内のマナの自室に居るので、当然ながら同居人の桜咲も部屋に居る。

俺達が性行為するのに気を使って、近衛の部屋で寝泊まりをしていると思っていたのだが、

この部屋に隠れて出歯亀していたようだ。

せつちゃんはムツツリスケべなんだな、と思わず口にする。

「だれがムツツリスケべなんですか。」

一日中盛ってる常木先生には言われたくないです!!」

桜咲が全力で否定するが、

俺の下腹部をチラチラと赤面して覗いているので説得力がない。

桜咲の言う通りにするのは癪だけど(？)、俺自身も早く寝たいので帰ろうかな？

そんな事を夢現に陥りながらも考えていると、

マナが突然立ち上がり、二段ベッドの上段に寝ている桜咲を引きずり降りし始めた。

もしかして俺が「盛ってる」って言われて腹を立てたのか？兎に角マナを止めないと…

桜咲を組み伏せているマナを押さえようとした直後、桜咲が甘美な悲鳴を漏らした。

見れば桜咲のズボンの中にマナの手が伸び、桜咲の性器を弄っていたのだ。

「ばか、や、やめるマナ、なにをするんだ!？」

「ちよっと触っただけなのに、こんなに濡れているぞ？」

どうせ私達の行為に興奮して、一人でイジってたんだろ？」

「だから何の話だ！それよりも、手を、手を止める。何かがおかしいんだ!？」

マナに「自慰をしていただく」と、問いつめられ、桜咲がしらを切るが、

それをあざ笑うかの様に、桜咲の性器を弄るマナの手が激しくなる。

桜咲の性器がどれくらい濡れているのかを俺に確かめさせるかのよじり、

性器を掻き回す時に発するクチュクチュという嫌らしい音をわざとらしく立てていく。

それでも「辞める」と叫び続ける桜咲の口を塞ぐと、マナが桜咲に口づけをした。

傍目にも舌同士を交合わせるキスをしていると分かるように、桜咲の頬がうねる。

性行為に対して初なのか、桜咲がマナの口内に向かって絶叫を上げ、呆気なく達してしまった。

達してしまった事で力尽きた桜咲が床に倒れ、ようやくマナの手が性器から離れる。

マナが桜咲の愛液がついた指を舐めながら、此方に向かって嫌な微笑みを浮かべた。

「ジン、今度は趣向を凝らして、二人で刹那を苛めないか？」

あつ、何をしても構わないが中に出すのは浮気に値するから駄目だからな」

シチュエーションセックス以上に意味が分からない提案をされた。

いくら桜咲が関係者で、出歯亀して興奮していたからって襲う理由にはならない。

そもそも桜咲とは合意の上ではないので、やったら普通に犯罪だ・・・でもやります。

桜咲が攻められているのを見て、射精したばかりで萎んでいた性器は勃起しているので、

我慢が効かない。それに桜咲を苛められるというなら、是非とも参加したい。

別に桜咲の事を嫌っているから苛めようとしているのではなく、

純粋にイジメた時の反応が初々しかったり、小動物みたいな反応をするから、

思わずイジメてしまっているのだ。例えるなら好きな子に悪戯し

てしまう感覚か？

兎に角そういう訳だ。桜咲に通報されたら終わりだけど、後事は後で考えよう。

マナの提案に合意するのを示すかのように、無言で桜咲に近寄る。桜咲の体が震えた。

「そういう訳だから、諦めて楽しんだらどうだ？」

「なにがそういう訳だ、ふざけるのも大概にしろ。」

常木先生もマナの口車に乗らないで下さい、貴方らしくもない」

桜咲から我に返るように説得をされたが、すみません元からこんな奴なんです。

そう桜咲に伝えると、「貴方はなんなんですか!？」と怒鳴られた。本当になんなんだろうね？

俺とマナが乗り気な時点で桜咲に逃げ場はない。

それなのに桜咲は一向に腹を括ろつとせず、マナの拘束を解こうと暴れ回る。

そんな桜咲に業を煮やしたのかマナが口を開く。

「別に本番をする訳じゃないんだから、気軽にやったらどうだ？」

それに、これから刹那の相手をするのは公私共にお前を支え続けた相棒兼親友と、

お前の為に色々都合を付けてくれたジンだぞ？いくらなんでも失礼ではないか？」

貞操の危機に暴れるのは当然だが、桜咲を虐めたいのでマナの説得にワザトらしく頷く。

確かに日々の勉強会や、二日半前の人生相談、近衛との仲直りなど、桜咲の為に色々骨折りにしていた。別に見返りを求めている行動ではないのだが、

桜咲がどうしてもお返しをしたいと言つのなら、素直に受け取りた

い。

だから、桜咲の説得を頑張れマナ！そう心の中で応援をする。

「それを今になって強調するのはズルいだろ……って話を逸らすな！」

「逸らしてないぞ。お前はジンにお世話になっというて、何も返せてないじゃないか。」

それはお前の主義に反するんじゃないか？ここでお礼をするべきじゃないのか？」

「いや、その、私はマナとは体格が違うし、腕っ節しか取り柄のない女だ、

だから恩返しは武力でしたい、と思ってる……ダメか？」

「私より弱いお前が武力で恩返しする場面なんてあり得ない。

それに相手が喜ばないお返しをしたって、しょうがないだろうが。

そんなお返しをするぐらいなら、私達の言う事を聞いた方がいいと思っぞ。

たった一回でお返しが済んで、ジンが大喜びするんだぞ。どうだ、

やらないか？」

「いや……だから、性的じゃなくて、もっと別の……」

「やるのか、やらないのか、どっちなんだ？」

「や……やる。なにをすればいいのか分からないが、取り敢えずやってみる」

マナの説得を黙って聞いていたのだが、その巧妙さに感心してしまっう。

よくもこれだけの台詞が咄嗟に口から出るものだ、ってか俺も騙された一人だった……

なんとなく複雑な気持ちだが、これで桜咲の了承を得ることに成功した。

「あの…これを舐めるんですか？」

信じられないという表情を浮かべた桜咲が、

マナの愛液や俺の精液で汚れ、天を仰ぐ様に熱り立った俺の性器を指差す。

桜咲の質問に無言で頷く。

性器への挿入なしで男をイカせるんだから、舐めるのは当然だろ。

「うう、なんで私がこんな目に、絶対おかしいよ…」

これから行われる事実を突き詰められて我に返ったのか、桜咲がたじろぐ。

そんな桜咲の恐怖心を払拭する為なのか、

仁王立ちしている俺にマナが近寄り、性器を舐め始めた。

性器にこびり付く汚れを落とそうと、性器に半被りしている皮を延ばし、丹念に舐める。

性器を口に含めるような舐め方ではないが、あまりの技巧に射精してしまいそうになる。

そんな動きを察したのか、マナが性器から口を離す。

「おい、私が舐めてるんだから、黙って見てないで刹那も来い」

迫り来る射精感で我を忘れていたが、これは桜咲の恐怖を払拭する為の行動だった。

マナが桜咲を手招くが、それでも動こうとしない桜咲にマナが苛ついたので、

マナが桜咲の腕を掴み寄せ、桜咲の吐息が性器にかかる距離まで無理矢理近付けた。

性器の臭いで咽せたのか桜咲の咳込み、その呼吸が性器にかかる。

射精寸前の性器に吐息が浴びせられ、性器が身震いして先走りの汁

が溢れる。

「ひゃあっ!? ちょっと待てマナ、いま動いたぞー! これって生きてるんじゃないのか!」

「生きてるに決まってるだろ。これ以上ジンを待たせるのは悪いから、いくぞ」

「行くって何処に!? こっちはマナと違って無知なんだから分かりやすく説明しろ!!」

「チツ、これだから処女は…」

「お前だって数日前はしょ…経験がなかっただろっが!」

限界まで熱り立った性器を目の前に、マナと桜咲が漫才を始める。

我慢出来なくて自分でマス搔いていきそうになるから、早くして下さい。

そんなお願いを二人にすると、マナが桜咲を罵倒しながら謝り、桜咲が挑発に乗る。

おい、こら、最初に戻ってるぞ? 仲が良いのは分かったから、早くしてー!

「刹那は先端の美味しいところを口に加えろ、私は睾丸を舐める」

簡潔に告げたマナが、宣告通りに股下に顔を埋めて睾丸を舐める。

それだけでは終わらず、二つの膀胱を口の中に加え、飴玉みたいに転がし始めた。

睾丸を口内で転がしているマナが後ろ手で手招きをして、早くしろと桜咲を急かす。

覚悟を決める為なのか、桜咲が両頬を両手で叩く。…噛むなよ。念の為に忠告をした。

苦手な食べ物を食べるかのように、桜咲が一気に性器の先端を口に含んだ。

勢いよく性器を口に含んだことにより、桜咲の前歯が性器に当たり、痛みを感じる。

口に含むだけで舌を動かす気配がない。この子は指示された事しかやらないのか…

口に含んでいるだけなのに性器の臭いと味が気に召さなかったのか、嗚咽盛らし始めた。

桜咲がせき込んでいる間に、マナが俺の背後に忍び寄ったのか自身のお尻が掴まれ、

肛門を外気に晒すようにお尻が左右に広げられる。唐突にお尻を広げられた理由は…

そんな事を悠長に考えていると、予想通りにマナの舌が肛門に進入して、蹂躪をする。

舌で肛門を攻めるといっのは、俺がネギに散々やっていた行為だったが、

与えられる快樂は指の比ではない。マナの舌から逃れようと、思わず前進してしまう。

その拍子に桜咲の顔面に腰が打ち付け、喉奥まで性器が押し込まれ、肉の壁にブツかる。

全く違う快樂に襲われ、桜咲の口内で射精してしまいそうなる。

僅かに残った理性を総動員して、桜咲の口内から性器を引き抜こうとしたのだが、

肛門を攻め続けるマナが邪魔して後ろに引く事が出来ず、桜咲の喉奥で果ててしまう。

喉奥に粘り気のある精液が大量に流されて窒息してしまったのか、

桜咲が呼吸を求めるように後ろに引き、桜咲の口から性器が離れる口内から抜き出された性器が、支えを失ったホースのように精液を

吐き出し、

吐き出された精液が桜咲の顔面に降り注ぎ、運悪く桜咲の片目にかかる。

精液が片目にかかった桜咲が、片目を腕で拭いながら悶える。精液が目にかかったら失明するんじゃないか？

根拠はないが、恐ろしい事を思い付いてしまう。

即座にルシエラの口内から厚手のタオルと、天然水のペットボトルを取り出す。

厚手のタオルに天然水を馴染ませて、桜咲の顔面を丁寧に拭う。

っていうか、マナはいい加減に肛門から口を離れてよ……

マナを引き離しながら、桜咲の顔面についた精液を丁寧に拭いていく。

拭い終わり、無事で済んだのか、精液がかかった桜咲の片目がゆっくりと開かれていく。

開かれた桜咲の片目を見て、思わず絶句してしまう。

片目だけ血が滲んだように赤いのだ。

まさか本当に失明してしまったのか!?今からやって治るかどうかは分からないが、

桜咲の失明した片目を治そうと、ルシエラに舐めさせ、自身も治療用の御札を取り出し、

桜咲に襲いかかるように治療を始めようとした最中、マナに制止させられた。

「なにを勘違いしているのか分からないが、慌てる必要はないよ。あれが本当の刹那だ」

マナが意味深な事を告げ、困惑していると足下に異物を感じる。

なにかを踏んだのだろうか？足下を退かしてみると、小さなプラスチック製品が一つ。

これはコンタクトレンズか？凝視すればコンタクトレンズ全体が黒みがかっている。

カラーコンタクトなのか？一体誰が……疑うまでもなく桜咲しか

いないよな。

桜咲に目の色と、カラコンについて桜咲本人に質問したかったのだが、

俺達の反応で自身が秘密にしていた事がバレたのだと悟ったのか、その場でうずくまり、何かに怯えるように身体中を震わせ始めた。助けを求めるようにマナを見たのだが、ジーンがやってくれ、と告げられた。

そんな無責任な、俺も原因だけど大概はマナなんだけど……

桜咲さん調子に乗ってごめんね。ところで凄く震えてるけど大丈夫？

もしかして邪気眼に目覚めた？目が合ったら俺達が石にされるからうずくまってるの？

せっちゃん、無視をされるのはキツイから、返答してよ……おーい、聞こえてる？

桜咲に向かって呼びかけるが、拒絶しているのかなんの反応を示さない。

万策尽きたので、奥の手を出そうと思い、うずくまっている桜咲に近付き、

桜咲のパジャマの中に両手を入れて、未発達な胸を揉んでみた。

マナと違って乳房が膨らんでいないので、触感的な面白さはないが、

本当の（？）女子中学生の乳房を揉んでいると思うと、際限なく興奮してしまう。

桜咲が無反応なのを良い事に乳房を揉み回し続けていると、桜咲から肘拳が飛んだ。

目で追えているが、自身の両手は桜咲の胸を揉み続けているので、避けることも防ぐことも出来ず、桜咲からの肘拳を鼻筋に喰らってしまった。

「人が落ち込んでるのを良い事に、貴方はなにをやってるんですか!? 斬り伏せますよ!!」

自身の鼻から血が垂れるが、そのお陰で桜咲を引き戻すには成功したようだ。

とうとうブチ切れた桜咲が此方に刀を向けるが、ルシエラに頼んで速攻で没収する。

「隠」で「口」の存在を隠していたのも合わさって、桜咲が啞然としている。

そんな様子を余所に、桜咲にどうして目の色を隠していたのか?、と直球で尋ねる。

「それは言わないと駄目なんですか?」

先生には関係ない事です。それよりも続きを始めましょう」

自身の机の引き出しから取り出したコンタクトを片目に詰めながら、桜咲が答える。

赤目について触れられたくないのか、嫌がっていた性的行為を自ら急ぎ立て始めた。

そんなに自分の本性を見せる嫌なのか。いや、自分の本性を晒した経験がないのだろう。

桜咲は馬鹿だ。馬鹿だから、自分の気持ちを全部胸の内へと仕舞ってしまうのだろう。

そうやって心が保たれている内はいいが、なにかの拍子で堰が切られたら桜咲の精神は崩壊してしまうかもしれない。

近衛に任せて少しづつ胸の内を曝け出そうとしたのだが、桜咲がヘタレ過ぎて、俺の思惑が達成されるのは大分先だろう。それまでに桜咲の精神が持つとは確信が出来ない。

だから、今日、此処で、桜咲の全てを晒して尽くしてやる。

そんな提案をルシエラを通じて、マナに念話で伝えると、一にも二

にもなく了承された。

どうやら最初っからそういう考えだったらしい。友達想いな奴だよ、全く。

性行為を急ぎ立てようと、桜咲がその場に横になる。

横になった桜咲に襲いかかるように、俺とマナが群がる。

手順について話し合ったつもりはないのだが、二人で桜咲の衣服を脱がしていく。

質素なパジャマの上下が脱がされ、自身の愛液で汚れた下着も脱がされていく。

なんの因果か、俺の掌の中に桜咲が先程まで着用していた下着が握られる。

脱ぎたてなので下着には人肌を感じ、広げてみると生殖器部分にシミが出来ていた。

シミの部分に舌を這わせると、僅かながらアンモニアの臭いがした。

いった拍子に漏らしたのか？そんな事を桜咲に尋ねると、

桜咲が下着を取り返そうと立ち上がったのだが、マナが後ろから抱き付いて拘束をする。

これからマナと二人で桜咲をイジメようとしているのに、

桜咲が暴れられたら、一人を押さえ込みのに費やさなくてはならないじゃないか。

それでは困るので、桜咲の身動きを封じる為に財布から一枚のシール台紙を取り出す。

取り出したシール台紙からシールを剥がし、そのシールを桜咲の腕に張り付ける。

そして桜咲の腕に張ったシールに向かってオーラを送り、シールに「口」を具現化する。

そう、桜咲の腕に張ったシールには神字が施されていたのだ。

このシールは本来、魔法の拾得が遅い子に魔法の疑似体験をさせる為に造られたのだが、

発想を少し変えただけで、恐ろしいシロモノになる。

桜咲の腕に具現化された「口」が黒い液体を吐き、

頭上に組むように掲げられた桜咲の両腕が、黒い塗料に浸食され、次第に凝固する。

これで桜咲の両腕の支配権はルシエラに委ねられる事となった。身動きは出来まい。

俺がルシエラに敵わない様に、自身の身体に「口」が具現化してしまい、

その「口」が操影術なので自分自身の身体を拘束されてしまえば、対処の仕様が無いのだ。

操影術の拘束を解くのは不可能だというのは身を持って知っているし、

桜咲に張り付けたシールは剥がすのに特殊な塗料が必要なので、剥がすのも至難だ。

つまり、この技を防ぐにはシールを貼られた箇所を即座に削ぎ落とすしかないのだが、

初見でその判断が出来る筈もなく、シールを張られただけで一撃必殺に等しい。

この技は俺達の「奥の手」とも言えるのだが、レイプに使ってるので何とも言えない気分だ。

複雑な心境だが、これで桜咲の身動きを封じた。

桜咲が拘束されていない両足と腹筋を使って、飛び上がるように起き上がるようにするが、

ルシエラが追加で重量操作系統の魔法を施したのか、桜咲の両腕が床から離れようとしない。

とにかく桜咲が拘束を解く事と、この場から逃れるのが不可能だと

というのが分かった。

その事に気を良くし、桜咲の本性を曝け出す為にマナと協力して桜咲を虐め倒そうとする。

まずはマナと分担して桜咲の乳房を口に含み、好き勝手にイジリまくる。

先程は触れただけで殴られたが、今回は拘束されているので反撃を恐れる心配はない。

桜咲の未成熟な乳房を果実のように頬張り、口の中に含んだ桜咲の乳房を舌で弾くと、

固く閉ざされた桜咲の口から甘美な悲鳴が漏れたのだが、途端に痛々しい悲鳴に変わる。

まるで痛みに耐えているようだ、俺は桜咲の乳首を舌で弾いているのに妙だ……

そんな事を思い浮かべながら、桜咲のもう片方の乳房を担当しているマナの方を向くと、

桜咲が痛々しい悲鳴を上げた理由が分かった。マナが桜咲の乳房を噛んでいるのだ。

自身の歯形を桜咲の乳房一杯に残すように、マナが桜咲の乳房中に噛みつく。

ギリツという肉に噛みついた音が響き、マナが満足したように乳房から口を離す。

マナの口が離れた乳房には、無惨な歯形が残り、僅かながら血が滲んでいた。

歯形などは魔法薬やルシエラを使えば、傷跡を残さずに治せるのだが、容赦ないな……

マナの行動力にドン引きしながら、桜咲の乳房を飴玉みたいに舌の上で転がす。

快樂と痛みの狭間を与え続けられた原因なのか、桜咲が内股を擦り始めた。

桜咲が十分にし始めたので、乳首が名残惜しいが、次の段階に移る

うとする。

特に話し合った覚えはないのだが、マナが俺を事をよく観察しているからなのか、

次の段階に移る為に桜咲の乳房から口を離すと、マナも桜咲の乳房から口を離し始めた。

阿吽の呼吸だ、俺は何もしてないけど。そんな事を思い浮かべながら、桜咲の乳房に目をやる。

桜咲の乳房は左右で違った姿を描いている。俺が担当していた左乳房は涎まみれだが、

マナが担当していた右乳房は菌形と血でまみれ、非常に痛々しい。

桜咲の乳房の治療なら、全ての行為が終わった後にすればいいのだが、

片方の乳首が菌形と血でまみれでは、萎えてしまっただけに支障を来してしまうので、

ルシエラに桜咲の乳房に唾液をたっぷり垂ら流すようお願いする。

右掌を桜咲の胸部に掲げ、右掌に具現化されているルシエラの「口」から唾液が垂れる。

垂れた唾液が桜咲の胸部に落ち、唾液の粘度に驚いたのか、桜咲が小さな悲鳴を漏らす。

そんな事には気にせず、桜咲の胸部に落ちた唾液を乳房全体に広げようとする。

桜咲の乳房に両手を置き、サンオイルを塗るように両手を動かして擦り付ける。

桜咲の身体は痩せ形なので、腹部左右を擦ると両手が浮き出た肋骨に当たり、

ゴツゴツとした骨の感触が伝わる。肋骨の感触は楽しいんだが、なんとなく不憫だな…

桜咲の体型に同情しながら作業を進めていると、桜咲の乳房の歯形や血が消えていた。

流石はルシエラの唾液だ、市販の魔法薬の比じゃないぜ。

純粹に治療をしていたつもりなのだが、桜咲の呼吸が荒くなっているのに気が付く。

ルシエラの唾液を前面に塗りたくっただけで、性的快楽を得るとは相当の好き者だな。

桜咲の羞恥心を抉ろうと、桜咲に「週何回でオナニーするの？」と質問をする。

「お、なにーって、なんですか？」

息も絶え絶えの桜咲が質問返しをする。

桜咲の様子を窺うに、質問の意味が本当に分からないようだ。

今の子って、自慰をオナニーって呼ばないのか？保健体育は専門外だから、分からないな・・・

「オナニー」という言葉を知らない桜咲に、自慰をしているかどうかの質問をする為に、

「マスターベーション」「手淫」「マンズリ」など、様々な言葉を選ぶが、どの言葉も知らないようだ。

おかしいな・・・あれ？もしかして桜咲って自慰を知らないんじゃないのか？

そんな事を思いつき、桜咲の性器を軽くなぞってみると、絶叫を上げながら腰を弓反りに浮かせた。

「今の行為がオナニーだけど、知ってた？」と桜咲に伝えると、首を僅かに横に振った。

同年代のマナやネギが知っているので、当然ながら桜咲も知ってると思ったのだが・・・

この子はどんだけ疎いんだよ。って事はマナとのやり取りが初めての絶頂だったのか・・・

性に疎い桜咲を見て、新たなイジリ方を思いついた。

当初の目的とは違うが、こっちの方が面白そうなので移行する。

俺達の攻めで桜咲が十分に出来上がり、もう逃げ出さないと判断して、

ルシエラに桜咲の両腕を拘束している操影術を解くようをお願いする。

途端に桜咲の両腕を覆っていた影が消え、桜咲の両腕が自らの意志で動くようになる。

唐突に自由になった桜咲だが、大した抵抗を見せず、俺の顔をきよとんと浮かべている。

一向に逃げようとはせず、もっと攻めて欲しいのか俺の腕を掴む始末だ。

そんな桜咲の腕を掴み返し、桜咲の手を自らの性器まで導いていき、筋に沿ってなぞらせる。

「ここをイジるのがオナーだよ、桜咲もやってみな」と伝え、桜咲に正しい自慰を教える。

俺としては正しい性教育を教えてだけなのだが、マナがドン引きしていた。なんでだよ…

最初の数回は俺が桜咲の腕を掴んで無理矢理自慰をさせていたのだが、

さっそく自身の気持ち居場所を見つけたのか、俺の腕を振り払って、一人で自慰を始めた。

余程自慰が刺激的だったのか、俺達に見られているのなんてお構いなし、といった様子だ。

遜色なしで自慰を覚えた猿みたいだ。

そんな事を思い浮かべながら、桜咲の空いた片手を自らの乳房まで導く。

片手を乳房まで導いただけで、何をさせるかの指示などをしてなかったのだが、

先程の行為を思い出したのか、自らの乳房を摘み始めた。

桜咲の順応差に思わず冷や汗をかいてしまう。

ひよっとして、桜咲の口を塞ぐ際にマナがキスをした時に、一服盛ったのか？

そんな事を思い浮かべながらマナの方を向くと、悪魔のような微笑みを浮かべた。

マナの反応で、桜咲が狂った原因に合致がいった。

本当に怖い子だな…アレの弟子だからか？

マナの行動力はさておき、自慰に夢中になっている桜咲に目を向ける。

性器に指を挿入してはいないが、陰茎部分を狂ったようににイジっている。

腰は痙攣し、口は閉じず、口から言葉にならない甘美な悲鳴と涎が止め処もなく溢れ出る。

マナが盛った薬の所為なのか、これが桜咲の本性なのか判断に困る。

このまま桜咲の自慰を眺めているのもいいが、

己の性欲を出し尽くした筈の性器が勃起してしまい、一刻も早く射精したい。

マナとやるものいいが、出来る事ならば猿みたいに発情している桜咲とやりたいのだが、

桜咲とやってしまうのは二人に対する浮気になってしまうので、出来ない。

スゴく下種だとは思うが、桜咲をオカズにマナを抱こうとしたら、マナから、ビニールに梱包された物を手渡されされ、固く握りしめられた。なんだろう？

マナから手渡された物を確認するために、手を開くと握り締められた物の正体が分かった。

コンドームだ。初めて実物を見たが、コンドームで間違いないだろ

う。

確かに「中で出すと浮気」みたいな事を最初に言っていたが、それでいいのだろうか？

コンドームを渡したマナの意図を確かめようと、マナの方を向いていると、

マナが俺達から離れ、俺と桜咲に向けてビデオカメラをセットしていた。

お・・・おう？マナの真意がよく分からないけど、意図は分かった。

マナはNTR属性なんだな。そう確信した直後、マナから放たれた拳圧が鼻先を掠めた。

・・・なんで俺の思考が読めるんだよ。理不尽だろ。

NTR属性のマナを満足させ、桜咲の本性を曝し、自身の性欲を治める為に桜咲を抱こうとする。

依然自慰に没頭している桜咲に馬乗りになり、桜咲の両腕を片手で掴み、頭上に掲げさせる。

自慰を中断された桜咲が此方を恨めしそうな目で見つめるが、これから自慰とは比べものにならない快樂を与えるつもりなので、許して欲しい。

そう桜咲に伝え、空いた片手で桜咲の性器を筋に沿ってゆっくりなぞる。

自分でイジると、他人にイジられるのでは得られる快樂が違うのか、桜咲が唸る。

ここまでは桜咲が先程からやっていた行為だが、桜咲に新たな快樂を教えてあげようと、

桜咲の処女膜を破らないように注意しながら、桜咲の性器に指を浅く挿入する。

性器に異物が挿入する感覚は初めてだったのか、

俺が馬乗りになっているのにも関わらず桜咲の腰が浮く。

マナが盛った薬のお陰なのかも知れないが、桜咲の過度な反応が面

白い。

桜咲が悶える表情を特別席で眺めながら、桜咲の性器に突っ込んだ指を抜き差しする。

桜咲が突然支離滅裂な言葉を喚き、それに伴って性器の中が締まる。

桜咲がいく寸前なのだろうと確信し、桜咲の性器から指を引き抜く。

お預けを喰らった桜咲が泣きながらイかせて下さいと懇願してきた。

そんな桜咲に最大級の快楽を与えようと、自身の熱り立った性器を桜咲の面前に近付け、

「指みたいなチンケなものじゃなくて、俺の肉棒でイかないのか？」と問いかけ、

問いかけられた桜咲は喉を鳴らし、緊張した口調で「お願いします」と呟いた。

馬乗りにされていた桜咲を床に座らせて、対面する形となる。

自身が求めた性行為が始まらない事に疑問を感じているのか、頬を高揚させながら小首を傾げ、きょとんと此方を見つめている。

そんな桜咲に唐突に自身の翼を晒すようにお願いをする。

突然のお願いに思考が付いていけてなかったのか、

一瞬だけぼんやりとしていたが、思考が追いついたのか拒絶するように簡潔に断る。

俺のお願いを断った桜咲に「それじゃあ、いくのはお預けだな」と吐き捨てるように呟く。

俺が呟いた直後、俺の意図を察したルシエラが桜咲の両腕を操影術で再び固定をする。

重量操作の影響か、桜咲が自らの性器を天井に向けるように仰向けに倒れる。

仰向けに倒れた桜咲に再び馬乗りとなり、先程の再現とばかりに指で性器をなぞる。

経験で分かるが、弱々しく、ゆっくりとした動作をいくら続けてもイく事はなく、

与えられる感覚は快楽ではなく、イきたくてもイケない事による苦痛の方が大きい。

その事を桜咲も実感したのか、泣き喚きながら「イカせて下さい」と何度も懇願する。

桜咲がどんなに懇願しようが、桜咲が翼を見せてくれないのなら絶対にイカせない。

むしろ夜が明けるまで、今みたいな絶頂寸前を保ち、永遠にも等しい生地獄を味合わせてやるよ。

そう桜咲に伝えた直後、獣のように泣き喚いていた桜咲が、子供のように泣き始めた。

桜咲の口から積年の不満が漏れ、桜咲がどんな悲惨な人生を歩んでいたのが窺える。

自身の人生が悲惨だったのを自身の翼や出自の所為になっているが、違う。そうじゃないだろう。

育ての親が奴隷に墜ちた奴が居たが、そいつは諦めずに戦って、誰もが満足する結果を手に入れた。

自身の特殊性から研究所の実験台にされた少女が居たが、今では…うん。幸せにやってる。多分。

俺やネギだって苛酷な道を歩み続けているが、この世界に生きている事を後悔した事はない。

桜咲に以前にも話したと思うが、

どんな最悪な事が起ころうが、所詮は考え方ひとつで気持ちは幾重にも変化する。

起こっちゃった事は仕方がない。だからといって、起こった事を悲

観的に受け入れるな。

起こっちゃった事は仕方がないんだから、どうせなら前向きに受け入れる。それで俺に抱かれる。

あの時に伝え切れなかった事と、自身の欲求を桜咲に熱弁する。そして激しく後悔する。

お互いに全裸で、萎えた性器を桜咲の面前に近付けて言う台詞じゃない。

仕舞いには一部始終をマナが用意したビデオカメラに収められているという始末。

怖くて桜咲の様子を窺えないが、マナは必死に笑いを堪えている。あとで性的に泣かす……

自身の発言に激しく後悔していると、桜咲の嗚咽混じりの泣き声が消えていた。

「先生は……常木先生は私の翼が見たいですか？」

私の本当の姿を見て後悔しませんか？罵りませんか？嫌いになりませんか？

マナやネギちゃんみたいに私を抱き締めてくれますか？し……幸せにして、くれますか？」

桜咲が途切れなく質問攻めにする。

そんな姿に安堵しながら、無責任ながら「勿論」と簡潔に肯定する。話の流れで桜咲と関係を持つ事になり、怖くてマナの方を振り向けないが、

きつと大丈夫だろう。大丈夫じゃなさそうだけど、大丈夫という事にしておく。うん。

心の中で葛藤していると、桜咲が「翼を見せたいので退いて下さい」と告げられ、

馬乗りになっている桜咲から速やかに退く。

「では、本当の私をお見せしますね……」

馬乗りから解放された桜咲が立ち上がり、覚悟を決めたような表情を浮かべる。

宣言した通りに桜咲の身体から気のようなモノが活性化し、桜咲の背中から白い翼が生える。

部屋を埋めつくような大きくて白い翼が桜咲の背中から現れる。

桜咲は自身の翼を穢れだと表現していたが、桜咲の翼は穢れとは対極の存在に感じた。

月明かりだけが照明だった薄暗い部屋が。桜咲から翼が現れただけで後光が射したように明るい。

桜咲の翼から舞い上がった羽を思わず掴み寄せてしまう。まるでお守りみたいだな。

俺の反応を拳動不審で窺っている桜咲に「ズルい」と、思っている事をそのまま伝えた。

「あの、それって、私が、賤しいって……その、ごめんなさい」

「違つぞ刹那。ジンが口にする「ズルい」は、訳をつけると、

「お前だけ、そんなモノを持つてるなんてズルいぞ。俺にもくれ」って
という意味だ」

俺の言葉足らずが原因で桜咲が狼狽する。

慌てて訂正しようとしたが、それよりも先にマナが的確な訂正をする。

マナの言い方では俺がみみっちい男だと思われてしまうが、本当にズルいだろ。

桜咲の反応から「飛べない翼」だと思ったのだが、箱を開けてみれば天使に近い偉形だ。

翼を羽翔かせて空を飛ぶとか羨まし過ぎる。俺も「手」を使えば飛べるのだが、

前々から自身が空を舞う絵図に気持ち悪さを感じていたので、翼を

使って飛びたいな…

出来るかどうかは分からないけど、終わったらルシエラと相談しよう…

登場人物全員が終始全裸だったが、桜咲の一件は概ね解決したと言ってもいい。

これで話が終わればギリギリ良い話で終われるのだろうが、そういかないのが俺だ。

色々あって性器が萎えてしまったが、射精したいという性的欲求までは萎えていない。

むしろ桜咲の天使のような姿を見て、自身の性欲で桜咲を汚したいと思う。

萎えた性器を怒張させる為に、桜咲に性器を舐めさせようとする。

少し前にも性器を舐めさせていたのだが、

その時の桜咲の様子は嫌々やらされているみたいで、舌の動きも単純だったのだが、

今の桜咲は顔を赤らめ、主人と再会した犬のように身震いをしながら性器に吸い付いている。

男を喜ばせる経験がないので舌の動きは相変わらずの単調で、

時々桜咲が嗚咽をする度に歯が性器に当たって痛い思いをしているが、

肝心なのはついさっきまで嫌々だった桜咲が、従順に俺の性器を舐めているという事実だ。

それだけで萎えていた性器が怒張を取り戻す。このまま桜咲に性器を舐めさせるのもいいが、

時間や体力の関係で俺が射精出来るのは一回が精一杯だろう。

そんな貴重な一発を口内で果ててしまうのは勿体ない気がする。

桜咲の性器の中で果てようと思ひ、それを桜咲に伝える。

桜咲が性行為の邪魔になる翼を戻そうとしたが、

折角（？）なので、そのままの姿で性行為をするように促し、桜咲が頬を綻ばして了承をする。

翼の関係で桜咲が床に寝転ぶような体位が出来ないので、対面騎乗位で性行為をしようとす。

っと、その前にマナから渡されたコンドームを装着しなくてはならない。

詳しい付け方は知らなかったが、自身の先走り汁と桜咲の唾液が良い潤滑油になったのか、

モタツク事なく、性器にコンドームを装着できた。俺の準備を終えるのを今か今かと

自身の性器をイジりながら待っている桜咲に、座っている俺に跨がるように伝え、桜咲が柔順に従う。

我慢出来ずお互いの性器を擦り付けてくる桜咲を軽く注意して、性器を挿入し易く為に、腰を少しだけ浮かせるように促す。

自らの腰を浮かせた桜咲の性器をなぞるように弄る。

桜咲の性器は自らの愛液でびしょ濡れだった。処女だが、これ以上の前座は必要なさそうだ。

自身の性器を桜咲の性器に合わせる。性器同士を這わせたただけなのだが、桜咲の腰が震える。

そんな桜咲を力一杯抱き締め、自身の腰を浮かせ、性器を桜咲の中に挿入する。

薬を盛られ、入念な前座を行い、痛まないように不意を狙って一気にやったのだが、

処女膜を破られる痛みを緩和する事が出来なかったのか、桜咲が発狂したように叫ぶ。

桜咲が慣れるまで腰を動かさずに待っていていよつと思っただが、

それよりも先に桜咲が痛みから逃れるように、激しく腰を打ち付け始めた。

相手を傷付けるように腰同士を打ち付け、与えられる感覚は快楽で

はなく苦痛に近い。

もしも挿入する角度を間違えたら、自身の性器が折れてしまうような不安さえ覚える。

腰を振る速度を一向に緩めようとしない桜咲に恐怖感を覚え、

落ち着くように促したのだが、俺の声が五月蠅かったのか桜咲がキスをして俺の口を塞ぐ。

暴力的な腰振りだったのだが、それでも性器が刺激されているのは確かで、

性器が精液を吐き出そうと膨張するのを感じ取り、認識途端に尿道から熱い固まりが通過、

身体中を痙攣させながら性器から精液が吐き出され、吐き出された精液は桜咲の中には流れず、

性器を覆ったゴムの中に溜められる。吐き出された精液が自身の性器を覆い潰す感覚は不快だ。

そんな事を思いながらも、身体は正直なようで止め処もなく精液が吐き出されていく。

精液が吐き出されている最中なのだが、それでも桜咲が暴力的な腰振りを止める気配がない。

射精中で敏感になった性器を容赦なくシゴかれ、桜咲の口内で喘ぎ声を出してしまった。

射精中にも関わらず腰を打ち付けられ、頭がおかしくなる程の快楽を感じる。

快樂によって自身が変わってしまいそんな錯覚を覚え、早く終わってくれと念じてしまう。

その念が通じたのか、桜咲がようやく絶頂を迎えた。これで解放されると安堵した瞬間に、

桜咲の中が性器を喰い千切るように締め付けられ、過度な刺激で再び射精をしてしまった。

まさか連続で二回も射精してしまうとは……こんなのは生まれ

て初めてだ。

ってか、これじゃあマナの意趣返しだろ。

念を使い切ったように身体全体が怠く、風邪を引いたのか頭痛する。

俺の口を塞いでいた桜咲の唇がいつの間にか離れ、浅い呼吸を何度も繰り返す。

性行為で死を覚悟する羽目になるとは、桜咲は未恐ろしい奴だ。

地獄のような射精を終え、ようやく呼吸が落ち着き始めた。

性器からコンドームを抜きたかったのだが、桜咲に全身を抱き締められて身動きが取れない。

「後で好きだけ抱き締めさせて上げるから、今は離してくれ」そうお願いをするが反応がない。

抱き締められている関係で桜咲の表情が窺えないが、桜咲が寝息のような呼吸を立てている。

もしかして寝てるの？俺を力一杯抱き締めているのに？なんだよそりゃ……

桜咲に力一杯全身を抱きつかれているので、無茶をする以外に拘束から逃れられそうもない。

桜咲を起こしたいのだが、桜咲の幸せそうな寝息を聞いてしまったは、起こすに起こせない。

頼みの綱であるマナの方を覗くと、俺達の性行為に興奮したのか自慰に没頭していた。

…もう、いいや。不快感が残るが、俺も寝ちゃおう。

桜咲を起こすの諦めて寝ようとしたのだが、

ふと、ある事に気が付く。俺ってどっち向きに寝ればいいんだ？

仰向けに寝れば、俺の背中に回っている桜咲の両手を床に押しつける形になってしまう。

左右に向けて寝るのも同様だ。唯一残された伏せ寝も、桜咲の翼を

巻き込んでしまうので却下。

あれ？ひよとして俺って朝までこの体勢なの？疲れてるのに？寝たいのに？

そんな事に気が付いたが、桜咲は幸せそうな寝息を立てていた。うん、桜咲が良いならいいや…